

基調講演

10:30 ~ 12:00



第2部 対談

親子の関係を振り返って

講師 田中 理恵氏 × 田中 章二氏

聞き手 中村 富子氏

司会 それでは皆様、お待ちかね、基調講演、第2部「親子の関係を振り返って」を始めさせていただきます。

では、田中章二さんと田中理恵さんのお二人です。皆様、どうぞ盛大な拍手でお迎えくださいませ。

お待ちかねでしたね。私が何でここにお邪魔虫でいるのかなと、邪魔だなど思われていらっしゃるんじゃないかとちょっとどきどきなんですけれども、実はお二人でここに座って、それも気詰まりなところもあったりするのかなという変な気を遣って出てまいりましたけれども、ひょっとしたらお邪魔だなど思っても、退場せよなどという会場から声が出ないようにお願いしたいと思います。



それでは、ご紹介いたします。

まず、田中理恵さんなんですけれども、どうぞ立ちいただけますか。

田中理恵さんは157センチなんですか。

田中(理) はい、157センチです。

皆さん、こんにちは。

司会 157センチの身長と、とても長い手足を生かした美しい演技を持ち味として活躍し、ロッテルダム世界選手権にて日本女子初のロンジン・エレガンス賞を受賞され、また全日本体操競技選手権大会個人総合優勝、NHK杯体操競技女子個人総合優勝など、輝かしい実績を残しておられます。ロンドンオリンピックにはご兄弟3人で出場されるという偉業を達成されました。現在、日本体育大学児童スポー

ツ教育学部助教としてご活躍されており、また東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会理事を務められるなど、多忙な日々を送っていらっしゃるということで、会場の皆様は、テレビなどではよくよくご存じの方も多くおられると思いますけれども、ご本人にお会いして感動という方もたくさんいらっしゃるかと思います。

先にお父様から理恵さんのお話もいろいろとお聞きしておりましたので、この後、お邪魔虫の私が再度この親子に突っ込んだ質問を試みようかなというふうに思っております。

そして、お父様、どうぞよろしく願いいたします。

田中(章) よろしく願います。

司会 何か私のほうが逆に緊張しているかもしれませんけれども、これから先は田中章二さんのことは田中さんと、そして田中理恵さんのほうは理恵さんと呼ばせていただきたいと思っておりますので、よろしく願います。

田中(理) よろしく願います。

司会 お父さんのお話、田中さんのほうのお話をいろいろ伺って、ああ、こういう親子であったんだなというのは、もう既に会場の皆様、ご想像ができたのではないかと思うんですけれども、ちょっと講演ではなかなか言えなかったかなというようなことも伺ってみようかなと思っております。

まず、3人のお子さんがオリンピックに出場することになった、その瞬間の父親としての率直な感想を伺いたいんですが。

田中(章) そうですね、とにかくわがままで、ぜいたくな夢がかなってしまったという驚きでしたね。と同時に、3人目の発表があったのが田中佑典なんですけれども、上から和仁、理恵、順番が決まってきた、一番最後に田中佑典という名前が読み上げられたときには、もう涙が出ました。

司会 涙がとまりませんでしたね。

田中(章) はい。

司会 そんなわけで、小さいお子さんのころから、とてもきちっとした理念をお持ちになってお育ていただいているなというのを感じましたし、その理念の一つ一つが会場の私たちの胸に、ああ、なるほどなというふうに伺えることばかりだったんですけれども、3人の子どもがすすくと大人になっていく。そして、体操をする子どもたちに自分たちの夢がかなっていく。そういった子どもたちの姿を見ながら、自分の手元を離れて飛び立っていく子どもたちに、何か親としての一抹の寂しさのようなものを感じたことはございますか。

田中(章) 寂しさはなかったです。どこまでいくんだろうという楽しみのほうが多かったですね。ですから、高校に1人ずつ、2年おきに高校から大学に出て行って、今まで5人で生活していた家が嫁と2人になる。そのほうが寂しくて……、

こいつら、どこまで盛り詰めてくれるのかという気持ちでいました。

司会 ああ、なるほど。今、ちょっとご本人の口から嫁というのが出まして、奥様のことですね。

田中(章) はい。

司会 奥様も体操をおやりになっていらしたと伺ったんですが。

田中(章) 高校と大学だけです。

司会 そうですか。

田中(章) 中学時代はソフトボールをやっていました。

司会 なるほどね。でも、やっぱり体操一家ですね。

田中(章) そうですね。

司会 さて、理恵さんはロンジン・エレガンス賞なるものをいただく。なかなかもらえない賞だと伺ったんですが、うれしかったでしょうね、そのときは。

田中(理) そうですね。実を言うと、ロンジン・エレガンス賞があるということは知らなかったんです。

司会 あっ、そうですか。

田中(理) はい。試合が終わってから、係の人に裏に来てくださって呼ばれて、よく試合が終わると、抜き打ちドーピングって、ドーピング



検査を抜き打ちで当てられるんですが、あっ、それに当たってしまったんだなと思って、すごいショックで、次の日、また試合があるのに呼ばれたので、うわー、早く帰りたかったのにといいながら裏に行くと、外国の方に呼ばれたので、外国の方が英語で、レオタードになってくれという話をされまして、ドーピングでレオタード、あり得ないんですよ。あれ、何をするんだろうって不思議に思って、通訳を通して話を聞いたら、あなたはロンジン・エレガンス賞、美しい体操をした、観客を魅了させたんだよという話を聞いて、そのときに私が一番憧れとしているロシアのホルキナ選手という、もう引退したんですが、小学校ぐらいから大好きな選手だったんですが、その選手が2回とっているという話も聞きまして、その瞬間からとてもうれしかったですね。世界選手権で優勝したことはないんですけども、金メダルをもらったんじゃないかというぐらい、ああ、美しい体操というのが世界で認めてもらえた。そして自分自身もきれいな体操、美しい体操というのを目指してきたので、やっと23歳で認めてもらえて、自分自身も、ああ、やってきてよかったな、体操を諦めないで頑張ってきたなと思った瞬間でしたね。

司会 なるほどね。本当にうれしかった気持ちが伝わってきます。

田中(理) うれしかったですね。

司会 父親というのは、田中さん、娘がどんどん成長していく、その姿を見て、何か寂しさとか、逆に

まぶしさとか、そういうものを感じるとよく言われるんですけども、田中さんは、そのロンジン・エレガンス賞をいただくような娘はどんなふうに映りますか。

田中(章) うーん、まぶしさとかは僕はあまり感じたことがないですよ。いつまでたっても子どもだと思っていますから、だんだん成長してきたなど。それから、言葉遣い一つにしても、ああ、大人になってきたな、よかったなという、うれしいなというほうが多いですね。だから、まだ別に嫁に行くわけじゃないし、寂しいなんていうのは、まだ今のところは感じたことはないですね。

司会 でも、なかなか和歌山に帰ってこれないんですよ。

田中(理) そうですね。仕事で和歌山に帰ってきても、日帰り東京へ帰っちゃうというのはありますからね。でも、何か恥ずかしいですね、今日。こういう立場で、まぶしいとか、寂しいという話を聞くと。

司会 なるほど。お父さんも恥ずかしいですか。

田中(章) ちょっと何か距離が恥ずかしいですね。

司会 舞台上で親子が立つということはめったにないでしょうからね。しかも、二人の関係を聞こうとする人間がここに一人おられますので。すみません。

田中(理) どんどん聞いてください。

司会 お父様のお話の中に、大変貴重な言葉がたくさんあったんですけども、3人のお子さんが体操を目指した、その何かきっかけになったことというのは、今思い返せばございますか。

田中(章) 僕がですか。

司会 ええ、家庭の中で。やれと言ったわけではなさそうなので。

田中(章) はい。やるように仕向けました。

司会 仕向けた。

田中(理) そうなんです。

司会 えっ、何か仕掛けがあったんですか。

田中(理) 家にトランポリンがあったり。

司会 家にトランポリンがあったんだそうです。

田中(理) 庭に大きなトランポリンがあったり、部屋の中には小さい、これぐらいのトランポリンがあったり、鉄棒が庭にあったり、気づけば、部屋移動するときに、トランポリンを飛びながら移動している。ジャングルジムがあったりもしましたね。家の中に滑り台があったりもしました。何か不思議な家でした。

司会 そうですね。それを飛び越えないと、滑らないと、隣のお部屋に行けなかったりするわけですか。

田中(章) そうですね。ですから、近所の子も、教員住宅に住んでいましたから、同じような年代の大人ばかりなんです。だから、子どもが3人、4人いる家庭があって、よくうちに遊びに来てくれたので、そういうおもちゃを置いておくだけ。やり方とかは教えませんが、置いておくだけ。

司会 必ずそれを飛んで行けとか、そういうことも言わなかった。

田中(章) さっきの話の続きになるんだけど、寝るときに、「あした、トランポリン飛ぶときに、飛んで足開いたらどんなになるんやろう」と言うんです。そうしたら、飛んでいるときに僕が、「足開いて、開脚ジャンプせえ」と言うので、教えてしまっただけで、強制しているんですけども、寝るときに言うと、子どもは、明日かその次の日に思い出して、やってみようかな、自分でやったら、どんなになるんかなという、結局は自分からやり始めたことにな

るので、そういうふうな仕掛けはやりました。

司会 理恵さん、はまっちゃっていたわけですね。

田中(理) そうですね。もう気づいたら、私自身も体操やりたい。兄が先に体操をしていたというのがありますし、回ったり、足を開いたり、逆立ちしている姿を見て、格好いいと思ったのもきっかけでしたね。当時は私自身も水泳とピアノを習っていました。ピアノは、こうやってこういう舞台に出て、きれいな格好をして、かわいく弾くんですが、ドレスを着て、かわいく弾くというのが大嫌いだったんです。それよりかは、回りたい、飛びたい、ひねりたいというのがすごく強くて、気づいたら、もう体操を選んでいましたね。

司会 それはDNAですかね、先生。

田中(章) それも少しはありますね。だから、こっちに向くように、向くように、向くように、環境づくりはしました。

司会 言葉ではなく、環境を整えていって、きっかけをつくった。

田中(章) それはありますね。

司会 へえーっ。そこへ子どもたちが次々とハマっていったという感じですかね。

一番最初に、じゃ、その体操のことをきちっとやりたいなと思ったのは、一番上のお兄ちゃん、和仁さん。

田中(章) そうです。和仁だけ、体操しないかというのを聞きました。

司会 あとは次々とお兄ちゃんに倣えみたいな。

田中(章) 小学校1年になったら、入ってきましたね。

司会 そうですね。家庭の中で自然にそういう方向づけをしたというのが、先ほどいろいろパワーボイ

ントで見せていただいたさまざまな言葉だったのかなというふうに。

田中(章) そうですね。考え方と、子どもを遠くから見ていただけというのがポイントかなと思います。

司会 なるほどね。多分そういう中で、父親に厳しくされたという経験はあまりお持ちじゃないかもしれませんが、あえて今日は、虐待防止というタイトルがついておりますので、虐待のあるうちとはとても思えませんが、でも、お父様の厳しさというのはやっぱり感じたことはありますか。

田中(理) 基本的には優しくかったです。すごく怒られたというイメージはないですね。でも、礼儀だったり、うそをつく、挨拶ができないという、そういう部分では厳しさはありました。でも、それも体操競技を通して学びましたし、コーチとして、父親としても、ちゃんとおはようとか、おやすみとか、本当基本なご挨拶、こんにちからはから全部始まってというのはやらないと。厳しさといえますか……。

田中(章) 当たり前のことだよな。

田中(理) 当たり前でしたな。

司会 何か、田中さんのほうはしつけとか、よく今は虐待をしつけと言いかえる親子があったりして、それが悲劇を生んだりしておりますけれども、田中さん流のしつけというか、厳しく育てるというあたりは、3人のお子さんに対してはいかがだったんでしょうか。

田中(章) 小さいときのほうが、どちらかというところ厳しかったと思います。

司会 小さいというところ。

田中(章) 小さいときのほうが。

司会 先ほど脳科学のお話をされておられましたけれども。

田中(章) 小学校1年、小学校3年、6年になるにしたがって、どんどん子どもたちの意見を聞き入れていましたね。「ああ、いいよ。分かった」と言っ



て、何か欲しいものあったにしても、例えば誕生日まで待ってよとか、私もサラリーマンですので、いつもお金があるわけじゃないですから、待ってよとかいう話もしたりして、何かのきっかけでもらえたりする。ただ、うちはクリスマスは、私、クリスチャンじゃないんであまりやりませんので、バレンタインとか、ああいうのは、子どもにも、「企業に踊らされるな」とわざと言って、やらないほうですから。

司会 じゃ、チョコレートはもらわなかったんですね。

田中(章) はい。現実的に、ちゃんと中でやってやろうと。ただ、何かものを買ったりするときには、できるだけ本物を買ってあげようという思いはありましたね。

司会 本物を買うというのは、どういったポリシーで。

田中(章) 体操の技につながるんですけども、よく似ている技と、これがきっちりとした理想像だということと分けする思いで、日常生活の中でもそうやってちょっとこだわっていたような気はします。

司会 なるほどね。一方で、失敗しても構わないとよくおっしゃっていたようなふうには受け取ったんですが、理恵さん、その辺はどうですか。

田中(理) そうですね、体操競技を通して、ミスをしていいとか、失敗していいというふうによくアドバイスをくれていたり、日常、人生に対しても失敗してもいいから思い切ってやれ、思い切ったことを大切にということ、日常も体操もよく話をしてくれました。なので、失敗すれば全て自分に返ってくるので、あっ、どうしてこうなったんだろうと反省

ができるんですよね。成功、成功、成功ばかりではなく、失敗してもいいから、何かチャレンジしてみな、それでも失敗しちゃったら、ゆっくり考えよう。それでもわからなかったら、一緒に考えてくれる。いつも、まず自分でどうしてこうなったのか、それでもわからなかったら、じゃ、お父さん、お母さんに聞こうかなというふうに、考えを小さいときからつくってくれていましたね。なので、あまり成功、成功に私自身もこだわらないタイプですね。失敗してもいいから、今日はこれやってみようかな、反省しようかなとプラスに考えさせてくれるというのは、やはりお母さん、お父さんから教わりました。

田中(章) 自分で考えて動くというのは、小さいころからもちょっとやりましたね。というのは、「早う勉強せんか」と言うたことがないんです、あまり。例えば、「この後どうするの」と聞いて、「何時からこのテレビ見たいから」、「あっ、そうか」。「何時から何時までお風呂入るし、その後やな、勉強するの。何時ぐらいから勉強するよ」と言ったときに、自分で決めたことを自分でしなかったら、怒っていました。勉強してないって怒ったのはないですね。自分で決めたことを何で自分で守れないのって怒っていましたね。

田中(理) そう。それを怒られるのが私です。兄と弟は決めた時間にちゃんとする。そこでしたね、兄弟の違い。

司会 なるほど。兄弟とっても仲がよかったそうで。

田中(理) はい、そうなんです。本当にけんかしたことないんですよね。兄が本当に優しい。優し過ぎるという部分もありまして、「これやって」と言ったら、「いいよ」っていつも言ってくれる。弟は弟で、兄と4つ離れて、私とは2つ離れていて、かわいいんですよね。小さいときから、「分かった」しか言わないような子で、本当にかわかったのが、あまりけんかをしなかったのと、小学校1年生から体操競技を始めて、体操の生活になってしまったので、帰ってくるのも遅いですし、帰ってきて疲れているというのもありました。

田中(章) けんかする暇がなかったんでしょうね。

田中(理) そう。体力もなかったです。あとは練習会場で3人いつも同じ体育館にいて、怒られていたり、厳しくされていたり、技が怖くて泣いていたりという姿をお互い見ているので、家に帰ると支え合いになるんですよね。お母さん、お父さんに、「お風呂入れて」とか、「洗濯物たたんで」と言われたときに、平等にじゃんけんをして決めるとか。一番下だからとかいうのはあまりなかったです、兄弟の中で。

司会 お兄ちゃんだから、弟だから、男だから、女だからという、そういう固定観念なしで。

田中(理) もう平等にじゃけんして、負けた者が洗濯物をたたむ。だから、3日連続、えっ、私っていうときもありましたし、3日連続、お兄ちゃんというときもありました。

司会 そういう姿を田中さんはご覧になっていて、どんな思いでしたか。

田中(章) いや、知らん顔しています。もう早く帰って、1杯飲みたいものですから、知らん顔しています。

田中(理) 本当に家に帰ると、普通のお父さんです。体育館に行くと田中先生、家に帰るとお父さんという区別を小さいときからつけてくれていましたし、でも、つい体育館で、「お父さん」って間違えて言うと、「おい、先生だろ」って突っ込まれたり、こうやって区別をつけてくれていたのが、やはり家では生活しやすかったですね。家へ帰って体操の話、「今日何で怒られていたの」とか、「何でこの技できなかったの」って聞かれると、子どもながら、それが大嫌いでしたから、やはり24時間体操のことを考えない、体操の練習のときだけ体操に集中する、家に帰ると遊んでもいいし、勉強してもいいしという自由な時間をくれるという、小さいときからオン・オフをつけてもらえた。そこがずっと現役生活を続けてきてプラスになる部分でしたね、何事に対しても。

司会 日々、オン・オフがあった。それがやはり田中さんの大きなしつけのポイントであったんですね。

田中(章) できるだけ離れて見ていましたから。だから、もう練習が終わって家に帰ったら、そんなにちゃらちゃらと声をかけることもなかったですし、離れて見ていて、あっ、いいことやっているとか、あっ、ちゃんと考えているとかいうと、僕は自分で納得して、これでオーケーというふうに思っていましたから。だから、それがたび重なると、後から教えるとか、後から指導するところでチャンスを見て、ちょろっと言っていました。

司会 さっきの6つの原則ですね。そういう切りかえをきちっとしてくださった、子どもさんたちにもちゃんと伝わっているというのがすごいですね。

田中(章) ありがたいですね。

司会 そういう言葉は、お子さんたちから聞かれたことはありますか。

田中(章) ないです。

司会 ないんですか。じゃ、今日は良かったですね。今日はオン・オフ、そして6つのチャンスをちゃんと生かして子育てをしていくというコツを教えてください。いただいたような気がします。

さて、お兄ちゃんと弟さん、お二人のご兄弟ですけれども、とても仲よしよって言われておりましたけれども、でも、やはり同じ体操を志す兄弟ですから、ある意味、ライバルでもあるのではないかなと思うんですが、その辺はどんな感覚ですか。

田中(理) ライバルというふうに思ったことは私はなかったです。同じ体操競技をやっている中で、男女で全然種目は違うので、ライバルというのはなかったですけれども、2011年の東京の世界選手権、2012年のロンドンオリンピックでは、3兄弟で私自身がオリンピックに出ますからってメディアにぼろっと言いまして、そのときはライバルというよりは、何か私たち3兄弟の中で田中ジャパンがあっ

たんです。田中家で全員がジュニアナショナルだったり、ナショナル選手として、代表としてジャパンをずっと背負ってきて、2011年と2012年の世界選手権という、この2年はとても大事な年なので、全員がしっかり日本、日の丸を背負って代表として海外に行くというのが、口には出さないですけども、3兄弟一人一人思っていたことだったので、田中家の中でジャパンから外れるというのがすごく怖かった。なので、負けたくないとか、お兄ちゃんに勝ちたい、弟には負けたくないということは全く考えてはなく、とりあえずこの3兄弟で絶対に日の丸をつけて世界に出て行く、それが私の夢でも目標でもあって、何か外れてはいけないなという決まりというか、すごく強い気持ちがあったので、ライバルというふうに思ったことはないですね。でも、あの兄弟がいたから、25歳でオリンピックに行けたというのはあります。支えてもらったな。存在は強かったです。

司会 今伺うと、まさにそうですね。3人が同じものを目指していたから、田中3兄弟のオリンピックがあった。

田中(理) ありましたね。体操競技の女子は大体18歳から20歳がピークって言われている中で、私が25歳でのオリンピックだったので、正直言うと、もう体を動かすのもつらかったですし、みんなと同じトレーニングをしていたら、練習についていけないので、練習が始まる1時間半前に入って、まず体のトレーニングから始めて、そこから後輩たちと一緒に、9時から練習となったら、その9時に合うように体をもって行って練習していたので、正直つらかったですけれども、兄弟、兄も弟も頑張っているから、私も一緒にジャパンから外れないように頑張らなきゃいけないという気持ちにはさせてもらえました。

司会 そうですね。先ほどの田中さんのご講演の中でも、ちょっと言葉が、3人そろってオリンピックというのが、父親としてのプレッシャーでもあったように私には聞こえたんですが。

田中(章) そうですね。だから、オリンピックが終

わった後に理恵が、「日本代表から外れるよりも、3人から外れるのが嫌だった」って僕に言ったときには、もうほろっときましたね、やっぱり。

田中(理) だって、どう声かけるかですよ、外れた選手に対して。

司会 そうね。

田中(理) 次、頑張ろうねって簡単に言えない4年間でもありますし、やっぱりオリンピックも限られた人しか出られないというのも3兄弟全員が分かっているんで、どうか1人残されないようにしがみついていたね。

司会 でも、本当に良かったですね。

田中(理) そうですね。

司会 今、そういうお話を聞いて、改めて和歌山から3人の体操選手が兄弟で出たというのが、皆さん、そうですね、会場の皆さんも本当に良かったことですね。

田中(理) ありがとうございます。

司会 今、お話を聞いて、改めて祝福をしたいなと思っています。

さて、田中さん、これから現役を退かれて、どんどん大人の理恵さん世界を築いていかれると思うんですが、そこに対して何か父親として思うことはございますか。

田中(章) 子離れが終わったかなというふうには思います。ですから、一人の女性として、上1人、下も1人おりますけれども、男の子らも現役が終わるときが来ると思います。現役が終わった後のほうの人生のほうが長いです。ですから、そこを一生懸命生きられる大人になってほしいな。どんな仕事にこうが、どんな状況であろうが、3人が多分一生懸命頑張れば、頑張ることを知っていますから、ちゃんといけるだろうなという思いで今おります。

司会 そうですね。

理恵さんは、このすばらしいチャンスを、きっかけをいっぱい無言で仕掛けてくれた父親に対して、どんな気持ちですか。

田中(理) いや、もう感謝は仕切れないぐらい、もう感謝の気持ちでいっぱいです。こうやってお父さんがいたから体操も続けてこられましたし、引退したときも、何かいつも背中を押してくれてありがとうという気持ちがすごく強かったので、これからもまだ娘なので、迷惑をかけるとは思いますけれども、いっぱい迷惑をかけていくと思います。

司会 かけてほしいですね。

田中(章) そうですね、反対にね。何かないんかいと言いたくなるかもしれないですね。

田中(理) しっかり迷惑をかけていきたいと思います。

司会 2015年に開催される和歌山国体で、チーム和歌山応援団団長になっておられますね。2020年に開かれる東京オリンピックの組織委員会理事でもあるわけですが、最後に、理恵さんの今後の夢、一言で結構です、聞かせてください。

田中(理) 夢……。正直、まだ探し中です。今、本当にいろんなお仕事をさせてもらって、オリンピックの組織委員の理事をさせてもらったり、和歌山国体の応援団長をさせてもらったり、日本体育大学の助教をしていたり、そして小さい子どもたちとかかわる仕事もたくさんしていて、体操教室だったり。でも、全てはやっぱり体操が大好きなので、あっ、やりたいな、やらせていただけますかって、気持ちよく仕事を受けることができ、2020年のオリンピック・パラリンピックも日本での2度目のオリンピックということで、本当にたくさんの人にも喜んでもらえて、あっ、自分たちもいい仕事をしたな。でも、このいい仕事をしたなだけじゃなく、これからもっとスポーツを大好きになってくれる子どもたちや、オリンピックを目指してくれる子どもたちを自分たちがつくっていかないといけない。でも、そ

の前に和歌山国体もあるということで、和歌山国体を通して、またたくさんスポーツを好きになってくれる子どもたち、そして、あっ、スポーツってすごいなってファンになってくれる上の方々にも出会わないといけないというふうにも思いますので、そういう部分では、夢というか、目標では、もっとこれから日本のスポーツ界を広げていく。スポーツを通して、礼儀だったり、仲間同士一緒に支え合いながら頑張ること、そして我慢することということも覚えるので、そういう部分を子どもたちにしっかり伝えていく。そして私自身も伝える中で、まだまだ未熟なので、学んでいかなきゃいけないなというのが今の目標でありますね。

司会 ありがとうございます。

田中さん、今日のフォーラムなんですけれども、ここの会場にお見えになっていらっしゃる方が虐待に直接かかわることは全くなくて、どちらかというところ防止と支援にかかわっている方がほとんどだと思うんですけれども、せっかくのフォーラムですので、素晴らしい子育てをされてきた田中さんに、今、子育てに行き詰まったり、悩んだり、そういう父親というか、親たちに、何か一言メッセージがあればご発言いただければと思うんですが。

田中(章) 子は国の宝と言います。だから、自分の子であろうが、よその子であろうが、私らが子どものはころは、隣のおじさんによく怒られました。今、そういうところというのはないですよ。家庭内のこと、口出しせんといってくださいっていうものの考え方も一つかもしれないんですけれども、地域の中でそういう変わっていいところと、変わってはいけないところがあると思うんですけれども、地域で、町内会で、隣のおじさんが注意をして、素直に受け入れられる子どもと親というのが、何となく疎遠になっているような気がします。ですから、みんなで子どもを育て上げていくんだという考え方といいますか、それをもっともっと広げてもいいかな。日本人的に考えたら、広げてもいいかなと思います。プライベートとかいうこともありますけれども、我々、親から怒られるよりも、隣のおじさんとかから怒られたほうが心に残っていますよね。そしたら、あっ、これしたらあかんのやというような思いで、

ちゃんと真っすぐ来たような気がします。ですから、地域の輪をもっともっと広げていく活動というのが必要なんじゃないかなと思っています。

司会 はい、どうもありがとうございました。

以上で、基調講演、第2部を終了させていただきます。

田中章二さん、理恵さん、お二人にどうぞ盛大な拍手をお願いいたします。どうもありがとうございました。

田中(理) ありがとうございました。

司会 どうも皆様、ありがとうございました。